遅まきの子育て経験記

「おはよう！リョリョ坊をお願いします」の声で妻とわたしのわが家を戦場とした一日がはじまる。9月、二学期産休明けでむすめがつとめはじめた。

朝寝を楽しみ、『つん読』と皮肉られた本を熱読し、絵をかき、ピアノの伴奏独習教本をひもとき「にわか文化人」風の自分の生活に少し照れながら定例の所員会議に参加するはずの夢は吹き飛んだ。きれいずきで気もみ性・職人気質の妻は6時半起床、孫の食事ずくり、ゾウキンがけに、わたしもあおられて、掃除機をかけ、洗濯物のアイロン掛けを受け持つ。7時、我が家の「王子さま」のご到着。満一才、よたよたしながら家中を走り回る。電燈のスイッチを押しまくる、開けられそうな戸はみんな開け、ガスの栓もひねってみる。また二階に勇敢にのぼっていく等々まさに好奇心のかたまりだ。目がきらきらしてなにかやる事がないかと探している。朝食をあたふたと終えたわたしたちは交互に彼のあとをおっかけまわして2回目のウンチの始末を終えた頃が遅いおひるになる。午後町内の公園、時には車で西大畑公園のに彼を犬のように解き放つ。雄叫びをあげ手をふりまわして芝生の丘に突進し、また鳩の群れやこどもたちの群れにつっこんでいくそのエネルギーはすごいものだ。さんざん騒いで疲れ切ってバタンと寝る。その時こちらもうたた寝をしないと身がもたない。二人はそれぞれちょっとした内職をしている。その時は当然一人で子守りをうけもつ。その日は相手の帰りをひたすら待つ二人だ。一人ではもたないのだ。その悲壮感に苦笑いしてる。義姉が「この頃、親のほうから〝子守り、お断り〟両親にも第二の人生を楽しむ余裕がいるから〟っていうのも増えているのだってさ」と教えてくれた。友人にこの話をしたら「〝じいちゃん、ばあちゃんは旧式の子育てだ〟とかもっとひどいのは〝きったねえすけ、さわらせらんねえ〟ってのも逆にあるんだぜ」といわれた。どちらもへんな話だ。乳児園にあずけると五本の指以上も一万円札をふんだくられるという娘夫婦をみかねての年金生活者の精一杯の支援というのが大義名分的な理由だが、孫の笑顔は年老いた母・夫婦をつなぐ暖かい太陽の陽射しだというのが本音だ。でもわたしの時間が夜が更けてからになるのはまいっている。（本）